

The easiest way to prepare a scientific presentation in English

薬学部 ホーク フィリップ

In recent years, an increasing number of undergraduate students in the School of Pharmaceutical Sciences are being given the chance to present their laboratory research in English at international meetings, both overseas and in Japan. For more than a decade, the Scientific English Program (科学英語講座) has been teaching graduate students to present their research in the **Academic Presentations for Scientists** (アカデミック プレゼンテーション) course, but until now there have been no such courses for undergraduates. Beginning in the 2017 academic year, a new course called **Research Presentations in English** (イングリッシュ リサーチ プレゼンテーション) will be offered to undergraduates. As undergraduate students have less familiarity with academic presentations, as well as less time to prepare them, I have developed a new “process-based approach” to teaching students how to make an English scientific presentation for the first time. In this talk, I will discuss the challenges that such teaching posed, and the solutions that I have developed to deal with them.

テーマ: Making a scientific presentation in English for the first time:
A process-based approach to teaching undergraduate students

医療現場での問題を発見し、自ら解決する能力を持つ薬剤師を養成する

薬学部 伊藤邦彦、井上和幸、辻 大樹、平井啓太

薬学部薬学科の学生は5年次に病院と薬局にそれぞれ2か月半ずつ実務実習を行い、専門的な知識や薬物療法における実践的能力、他職種とのコミュニケーション能力を習得する。しかしながら、さらなる薬物療法の専門性を高めるためには、臨床現場で起こる問題を発見する能力と自己解決する能力を備えた薬剤師の養成が必要である。本研究において学生自らが実務実習終了後の6年次に共同研究を行っている医療機関に定期的に訪問しながら、医師や薬剤師などとのコミュニケーションを通して、研究に関連する専門的知識を習得した。また、大学教員と共に臨床研究の成果を学会で発表し、卒業論文を作成することで自己解決能力を養うことができた。

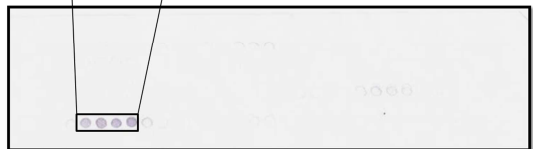
テーマ:リサーチファーマシスト育成のための臨床教育プログラムの構築

食物アレルギー物質の混入を瞬時に見分けるしくみ

伊藤圭祐¹、加藤綾子²、加藤重城²、高田誠²、中野祥吾¹、伊藤創平¹
¹食品栄養科学部、²プリマハム株式会社

食物アレルギー患者数の増加は世界的な社会問題となっています。アレルギー原因食品の使用・混入を正しく表示するためにはアレルギー原因物質（アレルゲン）の検査が不可欠ですが、市販されている検査試薬の分子メカニズムはほとんど分かっていないのが現状です。本研究では、ろ紙上に数百種類の食品ペプチドを結合させた“食物アレルゲン配列の全網羅ペプチドアレイ”を作製し、各種検査試薬（抗体）が識別するペプチド領域（エピトープ）を調べました。その結果、牛乳、鶏卵用の検査試薬のエピトープを1アミノ酸単位で精密かつ迅速に特定することに成功し、さらにバイオインフォマティクス解析の併用によって、本検査試薬の精度の高さを実証しました。安心・安全な食生活は、科学的根拠に基づいた検査により支えられます。今後、食物アレルゲン検査試薬の開発において、ペプチドアレイ技術の活用が期待されます。

```
MKLLILTCLV AVALARPKHP IKHQGLPQEV LLENLLRFFV APFPEVFGKE  
KVNELSKDIG SESTEDQAME DIKQMEAESI SSSEIVPNS VEQKHIQKED  
VPSERYLGYL EQLRLKQYK VPQLEIVPNS AEERLHSMKE GIHAQQKEPM  
IGVNOELAYF YPELFRQFYQ LDAYPSGAWY YVPLGTQYTD APSFSDIPNP  
IGSENSEKTT MPLM
```



抗 α 1-カゼイン抗体のエピトープ解析

テーマ: ペプチドアレイを基盤とする食品・医薬品成分標的タンパク質のリガンド結合マッピング

空気をきれいにする植物のカー様々な有機物質を植物は吸収浄化するー

食品栄養科学部 教授 谷 晃

植物が、光化学スモッグの成分や窒素酸化物など無機物質を吸収することは知られているが、大気中に100種以上存在する有機ガス成分に対する吸収浄化能力は測定の大変さからほとんどわかっていなかった。報告者は、この測定を可能にする特殊な分析機器を用いて、有機物質のアルデヒド類、ケトン類、アルコール類、ベンゼン、トルエンなどのガス成分に対する、観葉植物の吸収浄化能力を調べた。その結果、観葉植物はアルデヒド類、ケトン類、アルコール類をよく吸収すること、ベンゼンとトルエンをほとんど吸収しないことを明らかにした。植物のこれら物質に対する吸収能力の違いは、葉に含まれる水へ溶ける量と葉内部でのそれら物質を無害化する代謝能力に依存することが明らかになった。

テーマ: 高精度リアルタイム測定システムを用いた植物の大気浄化機能の網羅的解析

学生の貧困は県大生にも切実な問題です！

国際関係学部 津富 宏、小針 進
大学院研究科 齊藤 麻友佳

学費の高騰や親の収入減少、ブラックバイト等の社会問題が大学生に直面しています。県大生は安心して勉学に励むことが出来ているか、県大生の経済状況を把握する目的でアンケート調査を行いました。調査から見えて来たことは、県大生が紛れもなく貧困問題に直面しているということです。約半数の学生は生活費を捻出するために、また一部の学生は将来の奨学金返済のためにアルバイトをしている事が分かりました。そこには、アルバイトをしなければ生活出来ないという弱い立場の下、不当な労働条件で働く学生の姿も浮き彫りになりました。奨学金については、制度についての不十分な理解のもとで利用する状況や、卒業時に多額かつ長期にわたる返済を余儀なくされる状況が確認されました。一人でも、勉学に励む十分な機会を失っていたとしたら、それは大学全体の研究の質や機動力を下げることになると考えます。多くの有意義な学びを得た後、社会に、世界に羽ばたいていくであろう学生一人一人の可能性が最大限発揮されるよう、具体的な解決策を考える必要があります。

テーマ:学生の貧困と奨学金問題

好調な茶業者は、どのようなマーケティングを行っているのか？

経営情報学部 岩崎 邦彦

緑茶は心も体も癒してくれる。緑茶は日本人に愛されており、国民飲料といっても過言ではない。健康志向やリラックス志向の高まり、和食ブーム、おもてなしの機運の高まりなど、茶を取り巻く好環境にもかかわらず、業界では低迷している企業が少なくない。なぜだろう。

「消費者の緑茶への支出が減少しているから、茶業界は不振である」という話を聞くことがあるが、本当だろうか。もしかすると「原因」と「結果」が逆かもしれない。「茶業界が消費者にうまく対応できていないから、緑茶への消費支出が減少している」という側面はないのであろうか。「最近の若者はお茶をいれない」という話もよく聞くが、「業界が、若者がいれたくなるお茶を提案できていない」という側面はないのだろうか。

時代は動いている。業界も進化する必要がある。では、今、どのような茶業者が伸びているのだろうか。全国の茶業者を対象に調査したところ、好調企業の特性として、いくつかのポイントが浮かび上がってきた。報告では、具体的な分析結果と、結果から示唆される茶業のマーケティングの方向性を検討したい。

テーマ:静岡茶のマーケティングの新たな方向性に関する実証研究

看護系大学における共用試験の実用化のための問題の検討と受験者の感想

看護学部・西川浩昭

医療従事者を養成する課程では、臨地実習に参加する学生の学力と技術力を保証する目的で、全国の該当学部の学生を対象として、実施機構が全国同一レベルの共用試験を実施している。しかし、看護においては、臨地実習を行っているにも拘わらず、大学以外の様々な養成課程が存在しているため、共用試験の実施が出来ないのが現状である。本研究では、看護系大学に限って共用試験を実用化するための問題点を明らかにすることを目的とし、その方策として、少数の大学において研究協力に同意を得た学生を対象としてモニター試験を実施し、必要な資源、能力を探った。

実施上の問題として、作成された問題の善し悪しがあり、不適切な問題として正答率が著しく高い問題や逆に低い問題、合計点との相関が低い問題などが存在していた。共用試験はコンピュータを用いた CBT 形式で実施するがそれに関して受験生は、良い点として「結果がすぐに判る(78.3%)」、悪い点として「眼が疲れる(74.3%)」を主な理由として回答していた。また、本研究では 45 分で 60 問を出題しているが、この時間と問題数については「ちょうど良い(55.9%)」が最も多くなっていた。

テーマ: 臨地実習生の質の確保のための看護系大学共用試験の実用化の検討

地域の美術館との連携による美術鑑賞学習

短期大学部 藤田雅也

質の高い地域社会の形成に貢献できる感性豊かな保育者を養成していくために、地域の教育力のひとつである美術館との連携による美術鑑賞学習に取り組んでいます。美術館で本物の作品と出会う機会を学生時代に少しでも多く持つことは、これからの社会を生きていく上で必要となる思考力や判断力、表現力などの育成につながっていくと考えています。そして、未来を担う子供たちの豊かな感性を育むためには、保育者養成の視点から「みること」を大切にされた保育・幼児教育について考えていく必要があると感じています。

本発表では、保育者養成課程に在籍する学生を対象に実施した美術館での鑑賞学習と、事前学習及び事後学習について報告し、美術館との連携による美術鑑賞学習の意義と可能性について考察します。今後は、幼児及び児童を対象とした美術館での鑑賞活動について検討していきながら、ワークシートや鑑賞学習補助ツールの考案と作成を進めていきます。また、幼児及び児童を対象とした「鑑賞活動と表現活動をつなげるワークショップ」を学生が主体となって企画・実践するなど、学生の学びを地域社会へと発信し、実践力を高めていく取り組みへと展開させていきたいと考えています。

テーマ: 地域の美術館との連携による美術鑑賞学習プログラムの構築と実践的研究

静岡県立大学が「しずおか」のために出来ること － 未来を創る地(知)の拠点 －

「ふじのくに」未来共育センター (COC センター) 長 合田敏尚

文部科学省 地(知)の拠点(COC)整備事業では、COCセンターが中核となり、「ふじのくに『からだ・こころ・地域』の健康を担う人材育成拠点」の形成に取り組んでいます。

教育面では「しずおか学」科目群を充実させ、学部横断による多職種連携演習を行いました。研究面では「健康づくり」、「人口減少問題」、「地域づくり」のテーマごとにワーキンググループ(WG)を作り、地域志向研究プロジェクトを進めました。健康づくりWGでは、静岡市と連携し、健康の「見える化」と住民ニーズの把握を図り、健康フェスタやモデル研修を、多様な学部の教職員と学生の参加によって実施しました。人口減少問題WGでは、草薙地域の伝統文化である「龍勢」の魅力を次世代に伝える小冊子と動画を作成して地域の小中学生に伝え、牧之原市では、榛原高校の「地域リーダー育成プロジェクト」を支援しました。地域づくりWGでは、地域資源に新たな光を当てるツアーを考案し、「静岡の産業・歴史・文化を世界に発信!マップ」を作成しました。静岡及び牧之原の「未来交流サテライト」では、教職員や学生の地域住民との協働プロジェクトを支援し、交流事業を加速させています。

テーマ: 持続可能な健康長寿社会とその担い手づくりとしての大学の役割

インフルエンザウイルス感染細胞をきれいに光らせる

高橋忠伸¹、大坪忠宗²、池田 潔²、紅林佑希¹、南 彰¹、鈴木 隆¹

¹静岡県立大学薬学部生化学分野、²広島国際大学薬学部

私たちは、インフルエンザA型・B型ウイルスやおたふく風邪ウイルスなどの感染細胞を速く簡単に光らせる試薬を開発してきました。しかしながら感染細胞の周囲はぼやっと光っており、感染細胞の輪郭がきれいに見えるような鮮明な写真を撮影することは困難でした。今回、試薬を改良することで、インフルエンザウイルス感染細胞の輪郭を従来の試薬よりもきれいに光らせることに成功しました。この試薬はウイルスやその感染細胞が持っている酵素活性によって光っています。ウイルス感染細胞を鮮明に光らせる試薬は、ウイルス感染細胞を正確に検出することや感染細胞の酵素活性の位置を調べることに役立つため、今後のウイルス研究に大きく貢献していくものと期待されます。

テーマ: インフルエンザウイルス感染の高感度・高精度イメージング法の開発

次世代医薬品の新しい血中薬物濃度分析法をつくる

薬学部 轟木堅一郎，東京農工大・工 池袋一典，岐阜薬大・薬 林 秀樹

がんや関節リウマチなどの薬物治療では、次世代型医薬品である抗体医薬の利用が進んでいます。抗体医薬は疾患部位に対する選択性が高く、副作用も少ないのですが、その反面、非常に高額であるという問題があります。そのため、有効治療域濃度の維持や投与計画の設定、適正使用などを目的とした血中濃度分析の必要性が高まっています。低分子医薬品とは異なり、抗体医薬の血中濃度分析は非常に難しく、従来法では高額な分析装置などが必要となります。これに対し私達は、抗体や DNA アプタマーなどといった薬物を選択的に認識する分子を捕捉剤とした抗がん剤ベバシズマブの新しい分析法を開発しました。開発した分析法は大掛かりな装置を必要とせず、十分な感度で簡便かつ迅速に血中濃度分析を可能にすることから、将来、臨床診断や創薬研究の場などでの利用が期待できます。

テーマ: DNA アプタマーをアフィニティー素子とする次世代医薬の体内動態解析法の開発

脂肪細胞の数を増やす脂肪幹細胞に着目して肥満の予防・改善を目指す

薬学部・助教 山口賢彦

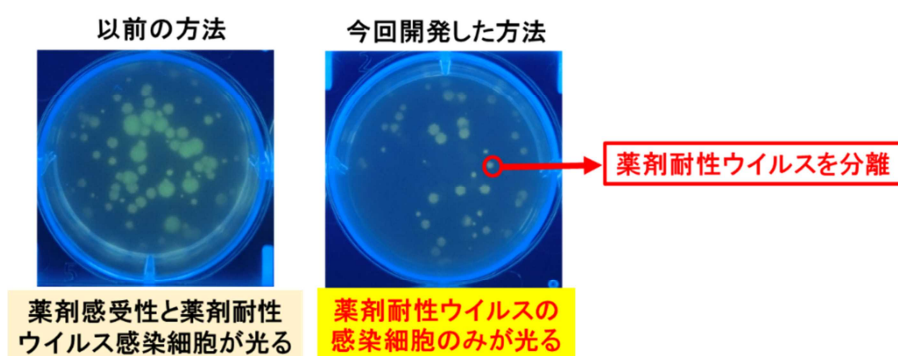
糖尿病やメタボリック症候群の発症には、内臓脂肪の蓄積が深く関係していることが最近の研究から明らかとなってきています。肥満に伴って内臓脂肪が蓄積する原因の 1 つは脂肪組織にいる幹細胞（以下、脂肪幹細胞と呼びます）が増殖して脂肪細胞になることです。したがって脂肪幹細胞をターゲットとし、その増殖と脂肪細胞への分化を抑えることで肥満を予防・改善する新たな方法が確立できると考えられます。そこで最初に生体内では脂肪幹細胞の数と性質がどのようなメカニズムで制御されているのか解明することを目指しました。脂肪幹細胞において豊富に存在し、かつ、機能的に働いている因子を探索したところ、Nuclear receptor 4a1/2/3 (Nr4a1/2/3) と呼ばれる核内受容体を発見しました。Nr4a1/2/3 は cAMP シグナルによって発現量が増加し、細胞の増殖と脂肪細胞への分化を抑制することが明らかとなりました。今後は Nr4a1/2/3 の量や機能を調節する化合物を食品成分などから探索することで、脂肪幹細胞の制御による肥満予防法の開発が期待されます。

テーマ: Gpr3-Nr4a axis による脂肪組織由来間葉系幹細胞の未分化維持機構の解明

薬剤耐性インフルエンザ感染細胞を光らせて、薬剤耐性ウイルスを効率良く捕まえる！

高橋忠伸¹、大坪忠宗²、池田 潔²、和田裕久³、紅林佑希¹、南 彰¹、鈴木 隆¹
¹静岡県立大学薬学部生化学分野、²広島国際大学薬学部、³静岡市環境保健研究所

2007～2008年に、インフルエンザA型・B型ウイルスのお薬の一つ「タミフル」が効きにくいインフルエンザウイルス（薬剤耐性ウイルスと呼びます）が世界中に流行しました。このお薬が効きにくい性状（薬剤耐性）を簡単に検出できれば、ウイルスの検査や研究、お薬の選択に役立つものと予想されます。今回、薬剤耐性インフルエンザウイルスが感染した細胞を速く簡単に光らせる方法を開発しました。感染細胞を生かしたまま光らせることで、薬剤耐性ウイルスを捕まえることも楽になりました。この方法は薬剤耐性インフルエンザウイルスの検出や分離を簡単にすることで、今後の薬剤耐性ウイルスの検査や研究に大きく貢献していくものと期待されます。



薬剤感受性と薬剤耐性インフルエンザウイルスを感染させた細胞を光らせた写真（左）、今回開発した方法により薬剤耐性ウイルスの感染細胞のみを光らせた写真（右）

テーマ：薬剤耐性インフルエンザウイルスの簡易検出分離法の開発

人工抗体でがん治療

静岡県大薬 小出 裕之、浅井 知浩、奥 直人

抗体は、私たちの体の血液中や体液中に存在するタンパク質であり、体内に侵入してきた異物を見つけると、結合して、無毒化することができます。一種類の抗体は一種類の異物にしか結合しないという特異性の高さから、ヒトの体内では数多くの抗体がつくられています。この特異性を利用して、現在抗体は研究材料のみならず医薬品や診断薬など医療分野でも活用されています。しかし、開発コストが非常に高いために患者の治療費負担増や、国の医療財政を圧迫する要因となっています。そこで私たちは、安価な材料から抗体のように標的のタンパク質に結合する微粒子を合成し、高価な抗体医薬品に変わる新たな薬剤の開発を試みています。本研究では、がんの増殖に必要なタンパク質である血管内皮細胞増殖因子に結合し、機能を阻害する微粒子を開発し、マウスに移植がんの増殖を抑制することに成功しました。今後更なる研究が進み、本研究成果が今後の抗体製剤開発に寄与することが期待されます。

テーマ：高度設計機能性材料を基盤としたプラスチック人工抗体の開発と難治性疾患治療への応用

「いつでも」、「どこでも」、「誰でも」使える薬物濃度分析法の開発

薬学部 轟木堅一郎, 東京農工大・工 池袋一典, 岐阜薬大・薬 林 秀樹,

近年、「患者身边での検査」、「ベッドサイド検査」などを目的に、「いつでも」、「どこでも」、「誰でも」、「迅速かつ簡便に」検査できる『ポイントオブケア検査』が注目されています。今回私達は、抗菌薬バンコマイシンの「いつでも」「どこでも」「誰でも」分析法を開発しました。この分析法では、手のひらサイズの超小型吸光度計を用い、抗原抗体反応を利用しています。バンコマイシンが含まれる血液試料に市販試薬を混合・反応し、吸光度計で測定するという非常に簡単な方法であり、その分析時間は反応時間を含め8分程度と迅速な分析が可能です。本法の測定結果を臨床現場で実際に使用される2つの分析法と比較したところ、いずれも高い相関を示したことから、本法が臨床分析法として実用可能であることが示されました。本法は、市販試薬の種類を変えることで様々な医薬品濃度分析や、臨床検査に応用可能です。私達の研究は単なる分析法を構築することだけではなく、患者さん自身や薬剤師さんが薬局、在宅医療において簡単に検査できる新たな検査スタイルを提案するものであり、薬剤師の職能拡大にも繋がる意義深い研究であると考えています。

テーマ: 自己血糖測定器を用途拡大したポイントオブケア診断法の開発

肥満を調節する新たな生理活性脂質の発見

薬学部・助教 山口賢彦

生活習慣病の患者数と治療にかかる医療費は世界的に増大しており、予防・改善するためには肥満や内臓脂肪症候群を解消することが極めて重要です。しかし食事と運動療法のみによって肥満を改善することは容易ではなく、肥満を抑制する分子標的薬の創製が精力的に行われています。私たちは血小板活性化因子 (PAF) が褐色脂肪の熱産生を促進するという新たな作用を見出しました。この成果は PAF が肥満抑制分子として働く可能性を示せたと言えます。しかし PAF は本来、アレルギーや炎症反応を促進する作用を持った脂質として知られています。そこで肥満によって進行する慢性炎症に着目し、その制御機構における PAF の機能解明を行いました。PAF が作用しない遺伝子改変マウスに高脂肪食を与えたところ、正常型マウスよりも肥満が進行していました。慢性炎症については脂肪組織では亢進していましたが、肝臓では抑制されていました。

今後は組織毎に異なる PAF の機能を詳細に解明することで、PAF をターゲットとする創薬への展開が期待されます。

テーマ: 血小板活性化因子 PAF により誘導される熱産生を介した肥満制御機構の解明

静岡県在住外国人の頭痛の原因と頭痛の対処を調べました

看護学部 前野真由美

静岡県在住の外国人を対象にした外国人無料健康相談と検診会の問診票と検診会時に行ったアンケートから、静岡県在住外国人の頭痛の原因と頭痛の対処を調べました。頭痛をもつ外国人は5人に1人の割合です。頭痛をもつ外国人は、他に、めまいや体のだるさ、腹痛、背中の痛み、手足の痛みを訴えています。外国人の考える頭痛の原因は、疲れやストレス、寝不足です。頭痛により日常生活に支障をきたしています。頭痛時の対処は、鎮痛薬を飲むことです。鎮痛薬は、日本製を用いる人と母国のものを用いる人と同じ割合です。頭痛の予防は特にしていません。静岡県に定住し、高齢になる外国人の健康増進や疾病予防に関わっていきたいと思います。その1つとして、現在、頭痛をもつ外国人のセルフケアに対する支援に関して研究しています。

テーマ:在日外国人が抱える頭痛の原因とその対処法

静岡発！介護職員のキャリアパス(キャリアを積む道)を支える研修パッケージの開発

短期大学部社会福祉学科 講師 鈴木俊文

この研究は、介護職員のキャリア開発にかかわる実務者の「手ごたえある経験」や「困りごと」等を事業種別・経験年数毎に比較し、その結果を基にキャリア形成過程で芽生える研修ニーズの類型化と、それに対応した研修パッケージの開発を目指しています。介護サービスの多様化は、介護ニーズの多様化・高度化であると同時に、介護人材のキャリアパスの多様性も伴っています。こうしたなか、静岡県ではいち早く「キャリアパス導入支援」に踏み出し、介護事業所がキャリアパス導入に乗り出せるよう支援的な環境整備が進められてきました。しかし、キャリアパスは小規模事業所では扱いにくい等の課題や、キャリアパスに係る研修体系も年々量的な充実度を増す一方で「事業種別」や「職員の経験年数」等、事業所毎の個別課題に応じて異なるニーズが発生しています。また、これらの課題により、研修効果を促進させるための工夫もより求められるようになってきました。本研究は、こうした課題に対応するための研修パッケージの開発を静岡県社会福祉協議会、静岡県介護福祉士会と連携して取り組んでいます。

テーマ:介護職員のキャリアニーズに基づく研修パッケージ(静岡モデル)の開発

年収270万円でもふつうに暮らせる社会の実現

部局・氏名：短期大学部社会福祉学科・中澤秀一

4人家族で、子どもを大学に通わせようと思ったら、年収が800～900万円くらいないと難しいのが現状です。ほかにも、老後の費用や住宅費、医療費など、生活にはお金がかかるのですが、年収が200万円未満の労働者は全体の約4人に1人、貯蓄無しの世帯は3割を超えています。どんな人でもふつうに暮らせるようにするためには、どんなことが必要なのでしょうか。

賃金 ①どこでもだれでも最低賃金を1,500円に引き上げる
②正規と非正規との賃金格差を同一価値労働同一賃金に変える

働くルール ①1日7時間、週35時間労働にする
②年間の所定内労働時間を1,800時間にする
③サービス労働（不払い労働）をなくす

社会保障 ①税によって賄われる最低保障年金を創設する
②医療・介護を必要な人が必要なサービスを受けられるようにする

住宅 ①家賃の低廉な公営住宅の供給を増やす
②家賃が収入のある一定割合を超える場合には家賃を補助する

教育・子育て ①児童手当の支給年齢を18歳までに引き上げて、支給額も月額30,000円にする
②高校までの教育費を完全無償化にする
③大学の授業料を引き下げ、さらに給付型奨学金制度を拡充させる

こんなことが実現すると、どんな人でもふつうに暮らせるのです。そして、多くの国で実現していることなのです。

テーマ：ディーセントワーク実現のための方策

国際法、英語で学ぶ？日本語で学ぶ？ —国際法学のよりよい理解を導く授業方法の検討—

国際関係学部 坂巻静佳・Jonathan William DEHAAN・近藤隆子

本学国際関係学部生に対し国際法について英語で講義した場合と日本語で講義をした場合とで、彼らの授業内容に対する理解度に差はあるのでしょうか？本研究では、母語が日本語又は日本語の堪能な留学生 19 名の協力を得て、この点について調査してみました。

その結果、国際法既習者で日本語の講義を受けたグループの理解度が最も高くなりました。次いで理解度が高かったのは国際法未習者で日本語の講義を受けたグループ、僅差で国際法既習者で英語の講義を受けたグループ、そして最も理解度の低かったのが国際法未習者で英語の講義を受けたグループとなりました。また、英語の講義を受講した学生は、日本語で講義を受講した学生よりも、法解釈の理解の精密さを欠く傾向が見受けられました。

調査参加学生に対するアンケートからは、英語で講義を受けた学生は、日本語で受けた学生よりも、講義内容を理解できなかったと感じていることが示されました。また、参加学生の多くから、専門科目については、十分な理解のために日本語で講義を受けたいとの希望が寄せられました。

国際法学のよりよい理解のために、よりよい授業方法を今後も追求していきたいと考えています。

テーマ: 文系専門科目の英語授業の実現性に関する予備的検討 —国際法を事例として—

日本語文章作成力 UP で、学習と就職に差をつける！

国際関係学部 坂巻静佳・竹部歩美・米山優子

大学のレポートや卒論で、就職活動で、そして卒業後も、文章のみで相手に伝えなければならない場面は数多くあります。文章を書くには、その前提として、その言語における文章の書き方のルールとマナーを知る必要があります。それは外国語のみならず母語でも同じことであり、日本人が日本語で文章を書く場合にも当然にあてはまります。

とりわけ文章の書き方のルールとマナーは、単語や文法と異なり、日常的な会話のなかで必ずしも身に着けられるものではないので、意識的な学習が必要となります。これらの技術は、知れば誰もが使うことのできるものです。そして、この技術を知っているか否かで、文章の読みやすさも、相手に伝わる度合いも大きく変わってきます。

私たちは、国際関係学部生の日本語作文の基礎を短期間で鍛えることを目指し、独自のテキストを作成して、「日本語作文ワークショップ」を開催しました。参加した国際関係学部生からは、レポート・卒論に役立つとの高い評価を得ています。この経験を踏まえて、テキストや教え方を改善し、今後も日本語作文能力向上のための効率的かつ実践的な教授法を追求していきたいと考えています。

テーマ: 日本語作文技術の向上のための効果的教授法

強制か順応か——スペインによるラテンアメリカ、アジア進出と布教政策

国際関係学部准教授 松森奈津子

2013年から翌年にかけて、徳仁親王、フェリペ皇太子（のち国王）を名誉総裁とする「日本スペイン交流400周年事業」が展開され、各地で日西関係をめぐる事業が多数開催されました。これは、1613年に仙台藩が本邦初の公的使節団（慶長遣欧使節団）をスペインに派遣したことを記念し、相互理解の促進を目的になされたものです。

こうした日西関係興隆の気運を受けて、本県でも、「徳川家康公顕彰400周年記念事業」の一環として、昨年4月に「歴史」と「健康長寿」をテーマとする「日本・スペインシンポジウム」が開催され、両国の関係者の交流が図られました。これは、家康が房総半島沖で難破したスペイン船の乗組員を厚遇し、フェリペ3世から返礼として金時計を贈られたとされる史実に基づき、交流の源としての静岡をアピールするものです。

本研究は、いわゆるグローバリゼーションの端緒として脚光を浴びている大航海時代の日西関係を、スペインによるカトリック世界宣教の観点から考察する試みです。仙台や長崎以外にも意義ある日西交流史が存在したことを、静岡から発信することを目的としています。

テーマ：大航海時代における日西交流と静岡——カトリック世界宣教と多文化主義